特集

子どもたちよ、大志を抱け!

Children, be ambitious

こども第一主義の「これから」

Part:2

子どもの目を見て、理解度を判断しながら少人数指導を行う北小の水野功太郎教諭

本誌創刊号で取り上げた特集「こども第一主義の『これから』」。今回はそのパート2として、小・中学校の教育にスポットを当てます。学力向上を基本にしつつ、子どもたちの「心育て」も視野に入れたさまざまな取り組みを紹介しましょう。

一人一人に注がれる温かいまなざし

習熟度などに応じて行われる少人数指導

「みんな、4キロは2キロの何倍になりますか?そう、2倍だよね。じゃあ、1・5キロは2・5キロの何倍かな?え、答えの出し方が分からない?それでは、どういう数式に当てはめれば正しい答えが出るか、みんなで一緒に考えてみましょう」。ここは北小学校(中区山下町)のある教室。5年生の算数の時間ですが、児童は7人しかいません。

すると、一人の児童が疑問の声をあげました。「2・5は割る数字?それとも割られる数字?」。先生は「さぁ、どっちだろう。4割る2は2倍だから、それを基にしてどんな計算が必要か考えてみましょう」と、黒板の図を示しながら丁寧に教えます。実はこれ、児童の習熟度や興味・関心に応じて行われる少人数指導のひとこま。5年生1、2組の算数の時間は3カ所で行われており、ここでは「今日の課題はちょっと難しい」と感じた子どもたちが集まり、普段のクラスから離れて基礎からじっくり取り組んでいるのです。

少人数指導に取り組む武石明広教諭

やがて、児童たちは次々と黒板に答えを書き込んでいきます。ポイントは「なぜ、こういう答えが出たか」を児童自身がきちんと理解し、みんなの前で説明できること。単に「1・5÷2・5=0・6」と教え込むのではなく、計算の過程を考えさせ、それを正しく表現できることが大切なのです。この授業を担当する武石明広教諭(教務主任)は語ります。

「少人数指導は、児童が自分の考えを発表しやすいのがメリット。多人数だと得意な子ばかりが発表して、苦手な子は委縮しがちですからね。人前で発表を重ねていくうちに、何かのきっかけで苦手を克服することも多いんです。わたしたち教師にとって一番うれしいのは、児童が授業で『分かった!』と言ってくれること。そんな時は、教師をやっていてよかったとつくづく思います」

一方、多人数の授業では、担任の先生を支援員や補助員がサポートするティーム・ティーチングという指導法もあります。浜松市では、小学校国語・算数指導支援員、小学校1年生多人数学級指導支援員などを市内各校に配置し、一人一人の進度や理解度にあった授業を展開しています。それでは、ティーム・ティーチングが行われている北小の2年生のクラスものぞいてみましょう。

ここでは国語の授業の真っ最中。黒板の前で担任の先生が熱心に授業を行っていますが、児童たちの間に先生がもう一人います。国語・算数支援員の左右田(そうだ)晃子さんです。左右田さんは児童たちの様子を注意深く観察し、一人一人に寄り添ってきめ細かく指導します。

ティーム・ティーチングで支援員を務める左右田晃子さん

左右田さんは、平成20年4月から支援員として勤務し始めました。「まだまだ勉強することばかりですが、これからも担任の先生とよく相談し、心育て・人育てをしていきたい」と意欲を見せています。

子どもたちへの教育は、まさに「未来の主役」を育てること。理想の授業を目指した先生たちの試行錯誤は、これからも続いていきます。

はままつの学びネットワーク委員による授業参観の風景

学力向上へのあくなき挑戦

新しい形態の授業でさらなる充実を目指す

平成20年4月、文部科学省が実施した全国学力・学習状況調査。全国的な子どもたちの学力などを把握するため、小学6年生、中学3年生を対象に行われました。この調査で、浜松市は小学校(国語・算数)、中学校(国語・数学)とも、全体として全国(公立)や県(同)の平均を上回る好成績を収めました。とくに中学校では、全体として平均を「かなり上回っている」という結果を得ています。

「しかし、その結果に安心してばかりはいられません。浜松市教育委員会は、第1回全国学力調査が行われた平成19年度に、学力向上推進会議(はままつの学びネットワーク)を設置し、教育内容のさらなる充実を目指しているんです」

はままつの学びネットワークの杉田豊委員長(静岡文化芸術大学顧問)は、そう言って表情を引き締めます。

委員は授業に対する評価をボードにはります

同ネットワークは学識経験者、臨床心理士、教育関係者などで構成。市内の学力向上推進モデル校を訪問し、子どもたちの学びを充実させるための調査研究、提言などを行っています。昨年11月には、モデル校の一つである鹿玉中学校(浜北区宮口)を同ネットワークの委員が訪問、1年生の国語の授業を参観しました。その時の様子をリポートしましょう。

20人以上の委員らが熱心に見守る中、授業はスタートします。この日の授業テーマは「薬を買う時に参考にするのだったら、どんな資料が一番いいか?」。薬の外箱、薬の説明書、薬のCMという三つの資料を用意し、その中でどれが最も参考になるかを生徒たちに考えさせるというものです。生徒たちは、一番いいと思う資料を一つ選び、「なぜそう考えたか」という根拠を明確にして、グループごとに意見を交換。これにより、まとめた意見をグループの代表が発表するという形式です。

実験で感じた「なぜ?」を自分たちで分析します

「この授業では、教科書などで身に付けた『説明的文章を正確に読む』という力を活用し、ある文章(資料)がよいか悪いかをよく検討して評価する能力を養います。生徒たちがもっている基本的な知識・技能を日常生活の中で活用できるようにするため、薬という身近なものを題材にしているわけです」。そう説明するのは、鹿玉中学校の三室洋司校長です。

「こうしたユニークな授業形態は、本校の教員が夏の研修会で検討し、綿密な授業計画を立てた上で、2学期から実行に移しました。かなり高度な内容なので最初はうまくいかない点もありましたが、最近は非常に上手に進められるようになってきましたね」

また、今回の授業は特別な支援を必要とする生徒に対する配慮もおろそかにしていません。授業の冒頭に「今日はこんなことをこんな順番でやるからね」と分かりやすく説明し、発表や自分の考えを文章化するのが苦手な子に対しては、個別に声掛けするなどして学習を支援しています。

子どもたちの「なぜ?」を引き出す

このように、学力向上推進モデル校として新しい授業形態にチャレンジしている鹿玉中ですが、通常の授業でも、それぞれの先生方が工夫を凝らした指導に取り組んでいます。一例として、2年生の理科の実験風景をご覧ください。

「さぁ、今日はガスバーナーでスチールウールを加熱し、加熱前と加熱後でどんな変化が起きるかを調べてみよう。加熱によって、スチールウールの重さ、色や手ざわり、電流の流れ方、薄い塩酸に浸した時の反応がどう変化するか、正確に測定してみてください」。先生の指示に従い、実験を開始する生徒たち。最初はおっかなびっくりでしたが、だんだん表情が生き生きしてきます。「あれ?加熱した後の方が重くなってるよ」「紙は燃やしたら軽くなるのに、なんでスチールウールは重くなるんだろう?」。

そんな生徒たちの反応について、この授業を担当する袴田得一教諭は次のように語ります。

「なぜ重くなるのかという考察は、生徒が基礎的な知識をうまく活用できるかどうかがポイントになります。実は以前の授業で、酸化銀を銀と酸素に分解する実験を行っており、その知識を思い出せば『燃焼によって鉄(スチールウール)と空気中の酸素が化合し、酸素が増えた分、鉄が重くなる』と分かるはず。こうした実験と考察は、生徒の思考力、判断力などを高める上でとても大切なことだと思います。最近、世間では青少年の理科離れを懸念する声も出ているようですが、子どもたちの『なぜ?』という疑問を引き出していけば、理科への興味は自然にかきたてられます。その点にこそ、わたしたち教師の工夫のしどころがあると思いますよ」。

生き生きとした表情で実験に取り組みます

むしろ、袴田教諭にとって悩みの種は「授業時間が少ない」こと。来年度からの新学習指導要領では、中学校理科の年間授業時間は2、3年生で拡大されますが「それでも、もっと時間をかけて子どもたちに自然界の仕組みを教えたい」と話しています。学力向上に向けた教諭の挑戦に終わりはありません。

地域や家庭だからできること

児童を守り続ける「ピーピーおじさん」

「ピーピー!」。早朝、上島小学校(中区上島一丁目)近くの横断歩道で、鋭い警笛の音が鳴り響きます。笛を吹いているのは、地域のボランティアで構成する「曳馬の子 まもり隊」の太田清さん。歩行者側の信号が青になるとすかさず笛を吹き、登校中の子どもたちが安全に横断歩道を渡るのを助けているのです。

上島小学校近くの横断歩道での登校風景

「ここの横断歩道は、毎朝394人もの児童が渡るんですよ」。太田さんは、そう言って眼鏡の奥の優しそうな目を細めます。

毎朝、この横断歩道に立つ「ピーピーおじさん」こと太田清さん

昭和18年生まれ、65歳の太田さんは、6年前から毎日ほとんど休まず子どもたちの登下校を見守り続けています。道路に立つのは午前7時から8時過ぎと、低学年が下校する午後1時から3時過ぎ。「それこそ雨の日も風の日も。さすがにここらじゃあ雪の日はないけどね(笑)。つらい時はないかって?それは全くない!まもり隊はわしの生きがいなんで、つらいなんて思いはこれっぽっちもありませんよ」。

6年間の活動で、子どもたちから付けられたあだ名は「ピーピーおじさん」。太田さんは登校する児童の一人一人に「おはよう!」と声をかけ、児童からも「おはようございます!」という元気な声が返ってきます。また、元気のない子に声をかけると「あのね、おじさん…。昨日、お友だちとケンカしちゃったんだよ」と悩みを打ち明けられることもあります。

「子どもたちはみんな顔なじみなんで、一人一人の性格も分かります。実は、活動を始めた最初の年に不登校気味の女の子と出会いましてね。1年生だったその子は、毎朝、学校の近くまで来ると『いやだ!』と言って、てこでも動かない。ある朝、わしはその子に言いました。『おじさん、いつもここで待っててあげるから、学校行けよ。なっ?待ってるからな』。翌朝、その子はわしを見て『あっ、おじちゃんいた!』と駆け寄り、それから元気よく学校へ行ったんです」。この女の子は、現在6年生。「今じゃ校内を走くりまわり、こないだの運動会では1等賞を取りました(笑)。6年間で驚くほど変わったねぇ、あの子は」。

「おー、ちゃんと宿題やってきたか?」。子どもたちとはすっかり顔なじみです

そんな太田さんの温かいまなざしは、小学校を卒業した子どもたちにも注がれます。ある時、橋の下に隠れてタバコを吸っている中学生の集団を見つけた太田さん。落ち着いた足取りで相手に近づき「僕たち、タバコうまいか?おじさんも昔吸ってたけど、体によくないぜ」と話しかけました。一瞬、緊張が走る中で、一人の生徒が声を上げます。「あれ?何だ、ピーピーおじさんじゃん」。すると、その場の空気はいっぺんに和み、みんな素直にタバコの火を消したのです。

「その後、注意した生徒の一人と再会し、『俺、タバコやめたぜ』と声をかけられました。先生が注意するとかえって反発する子も、わしのような『近所のおじさん』の言うことは案外素直に聞くもんです。そんな形で、今後も微力ながら学校のお手伝いをしていきたい」と、太田さんはしみじみ語っています。

子どもたちが自由に遊ぶ「伊平キッズクラブ」の活動風景

子どもたちが世代を越えて集うクラブ

さて、ところ変わってこちらは北区引佐町伊平にある伊平小学校の体育館。土曜日の午後7時半ごろ、10人ほどの子どもたちが三々五々集まってきました。やがて子どもたちは、倉庫からボールやマットなどを取り出して自由に遊び始めます。その様子を見守っている数人のお母さん。その中の一人で、浜松市小中学校PTA連絡協議会副会長の鈴木博美さんは次のように語ります。

「これは『伊平キッズクラブ』というこの地域独自の集まり。月1、2回、幼稚園から中学生くらいまでの子どもたちが集まって、上下の隔てなく遊ぶ場です。遊び方は子どもたちの自主性に任せ、わたしたちは危険がないよう注意を払うだけ。放っておいても、年上の子が小さい子たちの面倒をちゃんと見てくれるんですよ」

クラブがスタートしたのは今から8年ほど前。「子どもたちが地区や世代を越えて交流する機会を作ろう」と、スポーツ好きの鈴木さんたちが発案しました。4児の母である鈴木さんは、何人かの子どもたちにクラブへの参加を呼びかけましたが、その中に少しユニークな子がいました。頭はいいのだけど、どうしても学校になじめない、大勢の友だちと遊べないという子です。

「その子は、ウチの長男とだったら遊べるというので『じゃあ、二人一緒にクラブに入りなさいよ』と誘ったんです。幸い、その子はクラブが気に入って、やがてはほかの子どもたちともバスケットやドッジボールをできるようになり、現在は薬学系の大学に進学しています。クラブでの遊びが、あの子の心を開く一つのきっかけになったとすれば、それは素晴らしいことだと思いますね」

習い事はいやだけど、クラブに行くのは好きという子も多いそうです

地域の子どもたちは地域の中で育てていくという、地元の皆さんの強い気持ち。それとともに、優しい心を育てるベースは、やはり家庭教育です。それがあるからこそ、ユニークなクラブの活動が成り立つのではないでしょうか。

お母さん方の子どもたちへの愛情が育(はぐく)むクラブの活動は、今後、ますます広がっていきそうです。

「小・中学校教育の」ここが訊きたい

浜松市教育委員会
髙木伸三 教育長

今回の特集では、小・中学生の学力向上への取り組み、地域や家庭での教育についてリポートしました。最後に、今後の小・中学校教育のビジョンについて、浜松市教育委員会の髙木伸三教育長に伺いましょう。

Q 教育の質的向上への新しい取り組みは？

A 学校教育で最も大切なのは勉強の時間、つまり授業です。この授業をますます充実させるため、今年度「浜松教師塾」という制度をスタートさせました。現在、この塾には16人の「師範」と33人の「塾生」が参加。師範は優れた授業能力をもつベテラン教員、塾生は20代後半から30代半ばまでの若手教員です。塾のメンバーは16のグループに分かれ、各グループで師範から塾生に対し、魅力的な授業を行うための「技術」が伝授されます。その中には、黒板への書き方、チョークの色の使い分け、教科書などを読む時の立ち位置、声の大きさや目線、生徒への質問の仕方なども含まれます。一見、単純そうに思えるこれらの技術も、ベテラン教員が築き上げた貴重なノウハウなんです。

この技術を伝授された若い先生方は目の色が変わり、授業への意欲が格段に高まりました。同僚の先生にもよい影響を与えているようです。一方、塾を充実させていくためには、先生方の自主的な参加が不可欠です。今後は塾を続けていくと、中には「わたしはいいですよ」と辞退する先生が出てくるかもしれません。そんな先生には「教師の醍醐味は子どもたちに『分かった！』と言わせることでしょ？そのためには技術を磨くことが必要です」と説得したいと思っています。

Q 教員免許更新制の導入については

A 教師の指導力低下が原因で、平成21年4月から導入されるこの制度は、教員免許に10年間の期限を設け、大学などが開設する30時間の免許状更新講習を受け、修了確認を受けなければ免許が更新されないというもの。先生方にとっては厳しい制度かもしれませんが、定期的に最新の知識・技能を身に付けることは、よりよい授業を行う上で必要不可欠なこと。浜松市では8年前から教師の指導力向上のための研修を行っており、指導力不足と判定される人が残念ながら数人います。免許更新制によって、今後、教員の資質や能力がさらに向上することを期待しています。

Q 問題行動や不登校などへの対応は

A 粗暴行為など中学生の問題行動については、全体として減少傾向にあります。問題行動を少しでも減らそうと、学校、地域、家庭が一体となって取り組んだ成果が出ていると思われます。しかし、その一方で小学校、中学校とも不登校が減少していないことが心配です。図Aにあるように、不登校は平成17～19年の3年間で増え続け、19年度の時点では900人に達しています。現在、不登校の定義は「年間30日以上の欠席」。この定義は少し厳しすぎるかもしれませんが、出席となっている児童・生徒でも、教室に出られずに保健室や相談室で学習している子がいます。それを考えると、年間30日以上の欠席というのは正常なことではありません。

不登校の原因は100人いれば100通りで、その対応策も100通り。一筋縄ではいきません。幸い浜松は山あり、川あり、海あり、湖ありと、他地域より子どもの心を癒やす環境に恵まれています。市は天竜区の阿多古川流域を「※ほっとエリア」と位置付け、不登校などの子どもたちが自分らしさを発揮できる場として活用することを検討しています。

このほか増加傾向にある問題として、いじめがあります。ただ以前と違うのは、ある子が「自分はいじめられた」と感じれば、それをいじめと認めるという定義に変わってきていること。各学校では、いじめを受けたらすぐ、先生、友だち、親などに相談するよう指導しており、今後もこの体制を充実させていく方針です。

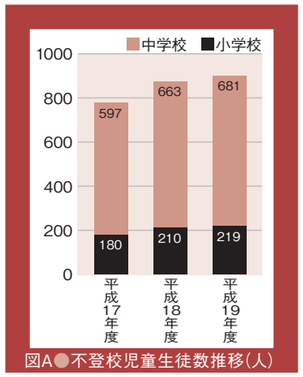
Q 浜松市が目指すべき未来の教育とは？

A 教育は子どもたちの「心」を耕すことであり、教育によって社会はよりよい方向へ変わる。そう、わたしは信じています。ただ、社会環境の変化により、家庭が果たしていた役割を学校に任せる傾向もあり、考え方が極端に偏った親御さんの問題も指摘されています。そうした問題を解決するのに必要なのは道徳の授業の充実。道徳を義務教育で9年間、きちんと学んだ子どもたちは、中学校卒業の9年後には成人して親となる年齢になります。親になった彼らが自分の子どもに道徳の大切さを伝え、それによって次の世代の心がまた耕される。教育とは、このような長期スパンで成果が現れてくるものなんです。そして、教育の起点となるのは学校であり、学校でやっていることを親御さんが見れば家庭が変わり、家庭が変われば地域が変わります。学校がしっかりした教育を行っていくことができれば、未来の地域社会は必ず正しい方向へ進むと思っています。そして、子どもたちには、ぜひ学校へ行ける喜びを知ってほしい。人は人と交わることで成長していけるものなんです。人の痛みや苦しみ、喜びを人として味わわせてあげることが最も大切であると、わたしは考えています。

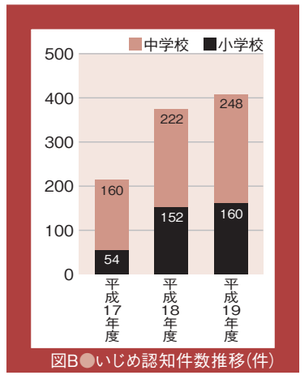
※ほっとエリア　不登校の子どもたちの学校復帰や社会的自立を支援するために設けられた地域。自然を生かした多様な体験活動や地域の人たちとの交流活動をすることができる。

長期スパンで子どもたちの心を耕す

Children, be ambitious・・・特集 子どもたちよ、大志を抱け！ こども第一主義の「これから」 Part:2



図A●不登校児童生徒数推移（人）



図B●いじめ認知件数推移（件）

「はままつの教育」そのほかの取り組み

● 30人学級導入モデル事業
子どもたちにとってよりよい教育環境を実現するために、小学1・2年生を対象に30人学級のモデル校を指定し、少人数学級について、成果や課題などを研究しています。

● 小・中学校や幼稚園の規模適正化
子どもたちのよりよい教育環境を整えるため、地域の実情や子どもたちの通園・通学の方法などを考慮しながら、規模適正化の推進に取り組んでいます。

● 教育相談支援センターの設置
カウンセラーやバイリンガル相談員を配置し、不登校やいじめ、外国人の子どもの就学に関する相談や問い合わせなど、教育に関する相談にきめ細かく対応しています。